

心理臨床における書くこと・描くことを巡って

坂中 尚哉 (医学部臨床心理学科)

(2022年12月21日受理)

Abstract:

本稿は、心理臨床における「書くこと」、「描くこと」をキーワードについて論じた。心理職であれば誰もが面接記録を書く行為を行っていることであろう。この「書くこと」の行為は、眼前にいない他者(CI)の身ぶり、手ぶり、口ぶりを思い出しながら、何度となくクライアントと再会する営みであることを昭和の批評家である小林秀雄や江戸時代の国文学者の本居宣長の古事記伝を手がかりに論じた。次に、心理臨床における「描くこと」の行為について、風景構成法を考案した中井久夫の描画法への基本姿勢をなぞりながら、筆者自身の風景構成法事例の紹介を行った。心理臨床において「書くこと」、「描くこと」に通底する視座は、CIのことを考え理解しようとする行為の一旦であり、ThはCIをむかいいれ、その関係に入っていくという態度であることを述べた。とりわけ、面接記録を丁寧に「書くこと」が臨床心理援助職の専門性にとって欠かせない重要な営みであることに触れた。

キーワード: 「書くこと」、「描くこと」、風景構成法

1 心理臨床における「書く」営み

現在、筆者は臨床心理士・公認心理師養成大学院の臨床教育に従事している。2年間の大学院教育では、心理臨床家を育てるための多様な仕掛けが存在する。とりわけ、附属心理臨床相談室内の①ケース担当、②スーパーヴィジョン、③ケースカンファレンスなどの「内部実習」は、初学者が「心理臨床とは何か」といった命題に触れる契機となり、臨床教育における3本柱である。

本小論では、心理職養成大学院における臨床指導及び筆者自身の心理臨床経験を通して、素朴に想起される「書くこと」、「描くこと」をキーワードに論じる。

はじめに、心理臨床における「書くこと」について触れる。まず思い出されるのは、面接記録を地道に逐語的に「書く」行為である。名取は、「臨床心理士の専門性って一体何かって考えた場合、それは面接記録を詳細に書き残すことではないだろうか」と2019年の日本臨床心理身体運動学会のシンポジウムで話されたことが思い出された。

面接記録を逐語的に書き綴られた資料は、ケース記録

やケースカンファレンス、そしてスーパーヴィジョンなどの検討資料として用いられる。面接記録には、ThとCIとのやりとりが詳細に記されるとともにThの所感や今後の見通しや心理学的理解などが記述される。

香川大学大学院の「臨床心理基礎実習」(修士課程1年生)では、ロールプレイ演習や試行カウンセリングを実施しており、面接記録は、ICレコーダーなどで録音した音声データをもとに逐語録に置き換える作業を繰り返し行う。筆者の大学院時代の経験に基づくならば、50分面接では、およそ12000-15000文字(A4用紙10枚~12枚)のやりとりとなり、逐語に置き換える作業時間は、8時間-10時間ほどかかっていたと思われる。そして、音声データを何度となく、再生、巻き戻しを繰り返し、Th役である自身の肉声、CI役の語り、CI-Thとのやりとりに加え、沈黙、笑いなど、面接場面の空気感を余すことなく紙面に記述しようとする。こうした逐語化しようとする営みは、きわめて地道な時間の流れに途方に暮れた思いになるのは筆者だけではなかろう。しかしながら、こうしたCI-Thのやりとりを逐語化しようとする営みは、その後

の心理臨床現場における記録作成の基礎となり、Thになるための鍛錬の一つとして求められる。言わずもがなであるが、実際の心理臨床現場では、IC レコーダーなどの持ち込みはないために、自身の記憶に基づいた逐語録となる。

かつて、昭和の批評家でもあった小林秀雄は、江戸時代の国学者、文献学者、そして医師でもあった本居宣長を主題に晩年「本居宣長」、「本居宣長補記」を著しているが、小林は、今から224年前の1798年、本居宣長が、既に解読不能に陥っていた「古事記」の解読に成功し、「古事記伝」を著しようとしたあり方に「宣長は、誰も読もうとしなかった古事記を読もうとした」と評する。そして、本居宣長は、35年の月日をかけて「古事記伝」を完成した折に以下の歌を詠んでいる。

「^{ふること}古事^{のみ}の記をらよめば いにしえのてぶりこととひきまみることし」(「古事記を読むと、古の人々の身ぶり手ぶりが見えるようだ。声が聞こえるようだ」)²⁾

小林(2004)は、「歴史を知るということは古の手ぶり口ぶりを自分で見たり聞いたりするようなそういう経験をいう」と示唆する。唐突に、ここで小林秀雄に登場願ったのは、本居宣長の古事記との向き合い方が、わたしたちの心理臨床を考えるヒントが隠されているように感じたからである。小林は、古の手ぶり口ぶりがまざまざと今の目に見えるように、今、実在しないものを思い出すこと、蘇ることが大切であることを述べている。そして、本居宣長が古事記伝の執筆を通して、古事記と「再会」し、「本居宣長」を通して、小林は、本居宣長との「再会」を果たしている。

我々が心理臨床における Cl-Thのやりとりを詳細に書き残す営みは、Th自身が面接に関する記憶の断片や Cl や Th自身が発した言葉を身ぶり、手ぶり思い出そうとし、記述しようとしており、つまるところ、Thは Clのことをその都度「思い出す」「思い出される」こととなる。いわば、Thは面接と次の面接までに Clと幾度となく「再会」を果たしており、こころの中で Clと対話しているのだ。

このように心理臨床の対話を詳細に記述する営みは、

機会的に文字化することではなく、眼前にいない他者(Cl)の身ぶり、手ぶり、口ぶりを思い出しながら、何度となく Clと再会する営みであると考えられる。それは、臨床心理専門職としての重要な専門性に関わる行為であり、何よりも Thにとって Clは Th自身の大切な対話の相手ということである。ならば丁寧に記述しない理由はそこにはないだろう。

2 心理臨床における「描く」営み

2022年8月8日、精神科医中井久夫が88歳で逝去した。2007年7月19日、臨床心理学者河合隼雄が現世から常世となったニュース速報に味わった衝撃と悲しみと類似していた。そして筆者はしばらく抑うつ感に苛まれた。

中井久夫が本邦の精神医療に残した功績は想像を絶する。今こうして執筆する最中、現代思想(青土社)から総特集「中井久夫」(2022)が編まれ、京都大学名誉教授、山中康裕はじめ多くの親交のあった方々から寄稿文が寄せられている。中でも、精神科医であり医療人類学者の江口重幸(2022)の「中井久夫の『方法への回帰』」を一読いただくと、中井が遺した膨大な仕事を垣間見ることができる。

さて、中井は、1969年に風景構成法を創案したことで知られる。中井(1984)の中井久夫著作集別巻1の「風景構成法と私」で風景構成法がこの世に生まれた経緯が詳細に語られている。それによると第1回芸術療法研究会(1969)が東京で開催された折に、河合隼雄による箱庭療法の講演会を聞いた中井が、その後風景構成法の着想に至ったことは広く知られている。特に、「一番印象に残ったのは、河合先生が分裂病者の箱庭を示して、彼らは枠の中に柵を置いて囲んでから、ものを置くという話でした。河合先生は、彼らの世界はこの枠の外側の狭い空白かもしれませんね、といわれました」(図1)と講演内容に触れ、その研究会の帰路に着く際、偶然にも河合と遭遇した中井は先の印象に残った柵のことなどについてたて続けに疑問をぶつけた。それが河合と中井の最初の出会いでもある。

中井：「箱の枠だけでは(保護)が足りないのでは？」

河合：「そ、そ、そうです、そうです。それに違いありません」

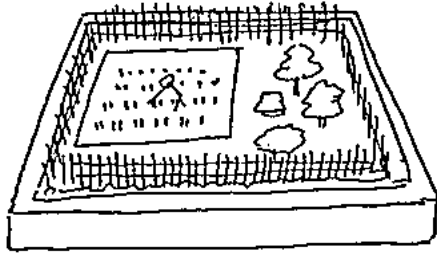


図 1 河合隼雄の講演のスライドからの記憶に基づく中井久夫の模写 (中井久夫,1984,pp265)

中井は「この時私は、帰ったら、明日、さっそく、枠をつけた画用紙とつけない画用紙とで描写してもらおうと決心していました」と河合との最初の出会いを回想している。風景構成法は、統合失調者の箱庭療法への適用可能性をめぐって考案されたものであり、「枠付け法」の着想からもわかるように、中井は統合失調者において、箱庭療法は非治療的になる可能性があることをすでに射抜いていた。山中(1984)は「(箱庭療法の)三次元空間から二次元平面に次数を下げ、川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石などといったアイテムを順次述べて、風景を構成させる、ということで、箱庭の持つ侵襲性を減じ、かつ、誰にでも、全く同じ導入法で追試可能とすることにより、まことに簡単な用具(画紙とサインペンとクレパス)と方法とで可能となった本法は、実に単純なもののごとくに思われるかもしれないが、アイテムの配列一つをとってみても、なかなかのシロモノであり、事実、これまでの私の十年に至る臨床の場での実際経験からいって、ロールシャッハ法に勝るとも劣らぬ卓越した方法であることが確信されるのである」と感嘆する。

さて、中井は1969年に河合と出会う以前より、当時勤務していた東京大学分院にて絵画を通じた臨床を行っていた。患者が絵画で自分の伝えたいことを表して面接の場に持ってくることを通して、九つの治療的意義⁹⁾を示している。とりわけ、「一人で部屋の隅で描かれた、いわゆる病理的絵画と、面接の場で描かれた絵画、あるいは面接の場で何ごとかを伝えるために描かれた絵画は、全く質が異なる。後者は、言語に直せるかどうかは別として、強いメッセージ性があること」、「芸術的完成を目指すことは、治療的に意味がないとはいわないが、しばしばメッセージよりも防衛のために用いられているよう

で、どちらでもあるかの見きわめが必要である。一本の線と巧緻な絵画は“哲学的に”対等なこと」のまなざしは、筆者が心理臨床において描画を用いる際の基本的姿勢となっている。また、中井が患者へ描画を促した際のエピソードとして、「患者さんが描きつつある絵を先生がゆっくり追いかけるようにしてカルテに模写されるのですが、患者さんは先生に模写されていることはあまり気にならない様子で描画に集中されていますし、先生はときおり小さい声で『ほお』とか『ほほう』とつぶやきながら、患者さんの絵を楽しげに描き写しています」(杉林,2015)のように、描写する方へのまなざしの温かさを感じる。

筆者は初回面接から画用紙を取り出すことを普通はしない。なぜなら、描画などの表現技法に内在されている侵襲性や暴力性を経験的に体験しているからである。滝川(1984)は、「言葉中心の面接が何回か重なって、一応治療関係が安定し、最初的话题もある程度出し尽くして、面接の緊張がフッと抜ける時期がくるが、画用紙を差しだすとしたらその頃が多い」と述べる。筆者はCLはこんな感じの風景や木になるのかなど、勝手ながら想像し、そしてThがCLに描いてもらいたい思いが生じた時におもむろに「絵でも描いてもらいたいですけど」と画用紙を差し出すことが多いように思う。案外、想像していたイメージと実際に受け取った描画表現の違いに驚くことがあり、その差異は面接の重要なCL理解につながり、ずいぶんと描画に助けられた面接が多いことに今更ながら実感する。とはいえ、心理臨床で出会うCLは格別絵心があるわけでもなく、日頃描く習慣もなければ、むしろ苦手だという人が多い。斯く言う筆者も絵心はない。CLにとっては、思いがけぬ場所で画用紙を前にして、当惑や抵抗感が生まれるのも自然であり、Thの興味関心に基づき機械的にそして道具的に使用されるのであればその暴力性は如何ほどか。厳に慎みたい。

さて、山中(1998)は描画技法を用いる治療的意義として「遊び空間を失っているクライアントに『ゆとり』を取り戻す」と述べる。確かに、言葉だけのやりとり一種の間が生じ、CLは「絵ですか!？」とその意外性を言葉にする。筆者は、描画を体験されたCLの多くは、その後の面接においても定期的に描画を行ってもらっている。

ここで事例 A さんを紹介する。A さんは、緊張、不安を強く訴えて来談した 20 代女性の C1 である。A さんの心理療法では、3 枚 (図 2、図 3、図 4) の風景構成法を行った。また、A さんの面接では、親からの自立をテーマにした語りが主題でもあった。

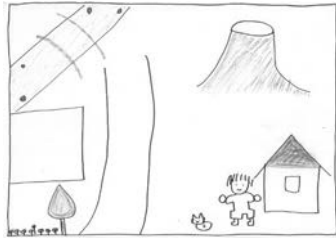


図2 風景構成法1枚目(5回目の面接)

2-1.1 枚目の筆者の印象等について

各アイテムを伝えると、すぐに描き始める。「川」も左上に迷わずに描く様子に、風景がこしらえにくくなるなど思う。「山」、「田」、「道」と単発でつながりのない風景をテンポよく描く様子に少しドキドキする。中景群になり、少し各アイテム間のつながりを見出せて少しホッとする。彩色時には、単発の色で薄く塗る感じ、「家」は、屋根の赤色のみ、「山」も頂上塗られていないのが気になる。加筆した「橋」は「透明の橋」に渡れるのだろうか、と心配になる。

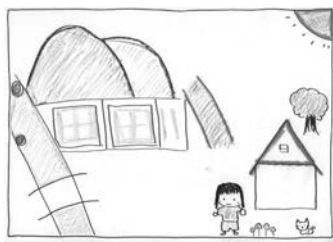


図3 風景構成法2枚目(13回目の面接)

2-2.2 枚目の筆者の印象等について

1 枚目と違って、色鮮やかになっており、各アイテムのつながりが見られる。また、女の子にも色付けされて、「田畑」が3面、橋がかけられる。全体的に風景らしくなっている。一方、「道」の行き場所が依然として不透明であることから、自分の進むべき道がどういう道なのか、迷いあぐねている印象を持つ。しかし、「田畑」の充実ぶりを見ると、成長するための土壌が出来上がりつ

つあるイメージを持った。

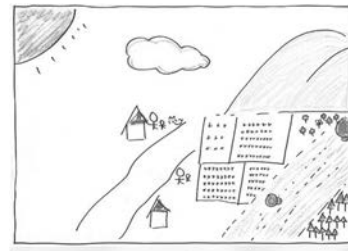


図4 風景構成法3枚目(49回目の面接)

2-3.3 枚目の筆者の印象等について

「川」、「山」が右側に描かれ、風景としての奥行きを感じる。「山」の麓には「田」が育ち、「家」や家族、「動物」が生活しており、1枚目、2枚目よりも全体的に風景としてのおさまりが良い。また、これまで「道」に行き先にはっきりしていなかったところ、3枚目では「道」が「川」と並行しながら、風景の中に位置づけられていることが印象的であった。

さて、上記の印象として記述した通り、3枚の風景構成法を眺めてみたところ、風景画の変化が見てとれる。1枚目の図2は、比較的早期の5回目の面接時に描いてもらったが、各アイテムのつながりが十分ではなく、羅列的に描かれたことに面接場面の凜とした語り口とのギャップを強く感じたのであった。風景構成法の構成型に関する基礎研究を行った高石(1996)によると、1枚目の図2は、Ⅲ「平面的部分的統合型」(「空とぶ道」「空とぶ川」など視点は不定で、複数の基底性が使用)となり、2枚目の図3は、Ⅳ「平面的統合型」(視点は不定多数だが、概ね正面の一定方向に定まり、一応のまとまりがある)、3枚目の図4は、Ⅵ「立体的統合型」(視点など斜め上あるいは正面の一点へ定まり、全体の遠近・立体感のある風景)となり、3枚を通して徐々に構成型に変化が生じている。

次に、「道」の描写に触れる。1枚目の図2、2枚目の図3ともに「立つ川」かのように上下に描かれ、風景の中に馴染んでおらず、「道」の扱いに困っている様子が想像される。しかしながら、3枚目の図4の「道」は、「山」もしくは「田畑」に向かうかのように、「道」の通りには、「家」や「人」、猫が描かれ、「道」との関わりを持つ描写となっている。一般的に「道」とは、

「始点から終点という目的に向かうものであり、意志や意図、目的、手段といった主体性と深く関連するもの」であり「あなたはどこからどこへ向かうのか」(川崎,2018)が問われる。図4は、4年を経過した面接終結時に描いたものであるが、その頃のAさんは、ある伝統的な職業の職人になっていかれたのである。

3 さいごに

本小論では、心理臨床における「書くこと」、「描くこと」を巡って気ままに論じてきた。いずれの臨床的行為もごくありふれた心理臨床の日常の風景であり、取り立てて論じるテーマではなかったかもしれない。日々の心理臨床は、当然ながら Cl-Th相互にコミュニケーションする営みであり、それは言葉や言葉以前の何か、そして描画などの表現を通してのやりとりが含まれるであろう。そこには Thによる Clの理解が欠かせず、Thの主体性が立ち上がるころにおいて Clと心理的に交わり、相互に「再会」を果たしている。この交わりは、Clのことを考えることに端を発している。本来、考えるとは、「物に対する単に知的な働きではなく、物と親身に交わる事だ。物を外から知るのではなく、物を身に感じて生きる、そういう経験をいう」(小林,2007)。つまるところ、Clのことを考え理解しようとする行為は、Thは Clをむかい入れ、その関係に入っていくという態度であり、そうした基本姿勢を指すのだと考える。それはすでにコッホ(1957/2010,pp20)が示唆する態度に集約される。

当初はわからない部分をそのまま持ちつづけ、どう理解したらいいかという問いを、何日も、何週も、何ヶ月も、何年も、見え方の成熟過程がある地点に達するまで、問い続けていると、秘密に関わる何かが自然と姿をあらわしてくる。

あらためて言うことではないが、Clを理解することは簡単なことではない。筆者は、面接記録を丁寧に「書くこと」、そして「描くこと」の両行為を通して、Cl-Th間に自然に生じる何かをまずは大切にしていきたい。

注

1) 日本臨床心理身体運動学会第22回大会(新潟医療福祉大学)

- でのシンポジウム「行・鍛錬・修練—日本のなごころとからだ」の話題提供者であった名取琢自氏の発言に基づいている。
- 2) 本居宣長が「古事記伝」44巻を書き終えたのは、寛政10年(1798)6月13日のことであり、35年の歳月を費やした文字通り畢生の大著である。小林秀雄が1977年に著した「本居宣長」(新潮社)によると、同年9月13日夜、宣長は観月会を開き全巻終業の祝賀歌会を開催した折に、「古事^{ふること}の記をらよめばいにしえのてぶりこととひき^{ふみ}ゝみるごとし」を詠んでいる。
- 3) 中井久夫が1969年に風景構成法を創案する以前に東京大学分院の勤務医である頃に出会った2人の統合失調症患者を通して、絵画を用いる面接の治療的意義を九つ示している。詳しくは、中井自身が執筆している中井久夫著作集別巻1の「風景構成法と私」(1984)を参照願いたい。

引用文献

- 江口重幸(2022). 中井久夫の「方法への回帰」. 現代思想 12月臨時増刊号 中井久夫. 青土社, 140-150.
- 中井久夫(1984). 風景構成法と私. 中井久夫著作集別巻1 山中康裕編 風景構成法 岩崎学術出版社, 261-271.
- 川崎克哲(2018). 風景構成法の文法と解釈 福村出版
- 小林秀雄(2004). 小林秀雄講演第3巻—本居宣長. 新潮社
- 小林秀雄(2007). 考えるヒント. 文春文庫, 84-85.
- Koch, K. (1957) Der Baumtest. Dritte Auflage. Hans Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳(2010) バウムテスト第三版 誠信書房, 20.
- 杉林稔(2015). 見学者の作法と「書く」作法. 統合失調者のひろば編集部編. 中井久夫の臨床作法. 日本評論社, 108-110.
- 高石恭子(1996). 風景構成法における構成型の検討—自我発達との関連から. 山中康裕編 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社, 239-264.
- 滝川一広(1984). 日常臨床の中の「風景構成法」. 中井久夫著作集別巻1 山中康裕編 風景構成法 岩崎学術出版社, 37-72.
- 山中康裕(1998). 個人心理療法(精神療法)と芸術療法. 徳田完治他監修 芸術療法I理論編. 岩崎学術出版社, 39-55.